

アジアにおけるアマチュアオーケストラ  
(JAO、パサクヌンガン・フィリピン、U.P. ARCO)  
— 重要な相互作用、文化交流、地域におけるアマチュアオーケストラ育成のための  
組織モデルと社会基盤

著者：エドナ・マルシル「ミチ」マルティネス 博士

※本論文の一部は、著者がフィリピン大学博士号取得のために執筆した論文『フィリピンにおけるオーケストラ：文化的概観 (1896-1986)』からの抜粋であり、2024年8月4日に東京都豊島区で開催された「第52回 JAO フェスティバル」および「NPO 世界アマチュアオーケストラ連盟 (NPO-WFAO) フォーラム」にて発表されたものである。

「パサクヌンガン・フィリピン青少年才能育成センター」という子ども向けの弦楽オーケストラに初めて参加したのは7歳の時であった。この団体は、ヴァイオリニストで教育者であり、フィリピン音楽や文化の推進者として広く知られたヴィセンテ・セールス教授が創設したものである。当時、セールス教授は公務員保健機構 (GSIS) に勤務しており、GSIS 職員の子供たちにヴァイオリン音楽を紹介し、無料でレッスンを提供するという高尚な目的を持ってこの団体を設立した。セールス教授は、同僚であり音楽家のプリミティボ・マルセロ氏と共にこの活動を推進した人物である。



写真 1-1. ヴィセンテ・M・セールス (1977年7月 パサクヌンガン・フィリピン・コンサートのパンフレットより。マルティネス家のコレクションより)。

パサクヌンガン・フィリピンは、フィリピンの子供たちに弦楽器演奏を奨励するセールス教授の先駆的な努力の成果である。「パサクヌンガン」という名称は、教授が自ら考案したもので、タガログ語の「パサク」(意味：差し込む)と、「助け

合い」を意味する「-nungan」を組み合わせた言葉である。したがって、「パサクヌンガン」は、共通の崇高な目的を追求するための協力的な努力を示す言葉として解釈される。後に、この団体が GSIS 職員以外の子供たちにも開放された際、私の両親は私と兄弟二人を連れて「パサクヌンガン・フィリピン」の始まりの地であるマニラのアロセロス通りの旧 GSIS ビルの講堂でオーディションを受けさせた。

毎週土曜日に約 50 人の子供たちが 10 人ずつのグループに分かれてヴァイオリンのレッスンを同時に受け、グルプレッスンを通じて幼い頃からチームワークと規律の重要性を学んだ。その後、参加者は 100 人に増えたが、多くは中流や低中流階級の出身だった。参加者の増加に伴い、セールス教授は音楽家の同僚を指導者として招いた。その後、セールス教授、チーム、そして子供たちはパサイ市のナヨン・ピリピノ (フィリピン村) 公園に広い会場が提供され新しい「パサクヌンガン」の拠点へと移動した。この移転によってグルプレッスンのためのスペースが確保され、さらに多くの子供たちが参加する機会が生まれることとなった。

さらにこの移転は、セールス教授と彼のチームによる「パサクヌンガン子供オーケストラ」の誕

生をもたらした。若いフィリピン人音楽家の育成を目指した場として構想され、この場から将来のフィリピン人演奏家や音楽教師が輩出され、国立オーケストラを担うことをセールス教授は期待していたのだ。彼の先駆的な発想において、フィリピンのオーケストラの未来は若いフィリピンの弦楽奏者を育成することにかかっている、と考えていた。弦楽器奏者の大規模な育成の場を設け、そこで弦楽アンサンブルの演奏を普及させることが彼の貢献とされていた。セールス教授は、人間の内面からバランスの取れた成長を理想とし、音楽や関連する芸術を重視しながら、人生の意義深い経験を通じてそれを実現しようとしていた。(マルティネス、140頁)

子供たちにとって、「オーケストラ」という言葉には特別な響きがあり、他のものよりも格段に優れたものという印象を与える言葉であった。実際、週末はヴァイオリンの技術を磨く時間として

過ごしていたため、遊びやゲームに費やす他の子供たちとは異なり、子供たちは自分たちが特別だと感じていた。ヴァイオリンアンサンブルのクラスから「オーケストラ」へ昇格することは、誰もが憧れる目標だったのだ。

弦楽オーケストラに選ばれることは、まさにステータスの象徴そのものだった。それは、自分の技術力、音楽性、そして成熟度を証明するものだったからである。それは上昇の証であり、私たちに名誉をもたらした。練習は非常に綿密で、アンサンブル演奏の洗練さがその中心的な要素の一つだった。私たちは指揮者の一挙手一投足や細かなニュアンスに注意を払いながら、それぞれのパートの細部にまで気を配るよう指導を受けた。また、隣席の奏者との連携を築くことが求められ、全体と調和して演奏する努力を常に促された。これによってチームワークの重要性がより一層強調されたのである。



写真 1-2. 1970年代初期の写真。ヴィセンテ・M・セールス教授が指導するパサクヌンガン弦楽アンサンブルグループの50人から450人の子供たち。ナヨン・ピリピノ（ピガンハウス）にて。



写真 1-3. ヴィセンテ・M・セールス教授が指揮するパサクヌンガン子供オーケストラ。左端に座るコンサートマスターはヴァイオリン教師のプリミティボ・マルセロ氏。マルティネス家のコレクションより。

オーケストラは、私たち若い音楽家にとって新しい世界を開いてくれた。私はヴァイオリンのアンサンブルグループで5年間の訓練を受けた後、弦楽オーケストラに昇格した一人だったが、そこでヴィオラに出会い、最終的にはヴァイオリンからヴィオラへと転向し、ヴィオラが私の選択する最終楽器となった。ヴィオラを愛するようになり、音楽を職業にしようと決心した。パサクヌンガン卒業後、フィリピン青少年オーケストラの団員となり、マニラの他の二つのプロオーケストラにも参画した。また、数年にわたり国際的なフェスティバルオーケストラにも参加する機会を得た。(前述、2)

1998年、私がフィリピン大学音楽学部で教職に就いてからわずか3年経った頃、当時の学部長レイナルド・T・パグイオ氏から、オーケスト

ラ・ラボラトリーのクラスを基盤として、大学オーケストラの再興を命じられた。私は彼の指示に従い、どの確立されたオーケストラにも欠かせない弦楽オーケストラの編成を始めた。こうして誕生したのが、フィリピン大学弦楽オーケストラ - UP Arco (以前は「UP 弦楽室内オーケストラ」と呼ばれていた) である。

2011年頃、学生メンバーとともに、アマチュア弦楽オーケストラを「UP Arco - フィリピン大学弦楽オーケストラ」と改名し、音楽の技術と規律を名誉ある方法で活用し、人生における音楽の意義深い理解を追求するという使命の元、活動している。「卓越性の結集と調和ある協力」を行動規範として、UP Arco は音楽と人々とのつながりを通じて、意味のある貢献を果たすために尽力し、2023年10月に設立25周年を迎えた。



写真 1-4. UP Arco、ファイル写真 2012 年



写真 1-5. 2016 年 UP ARCO 金賞受賞。第 2 回ミュージックフェスタ フィレンツェ (イタリア、フィレンツェ)



写真 1-6. 2024 年 UP デリマンアーツ月間での UP ARCO (UP デリマンコミュニティ向け)

UP Arco の成長と発展において、同じようなアマチュアオーケストラや、その他の演奏グループとの協力や学び合いの努力は、常に重要な役割を果たしてきた。意義ある活動を行うためには、志を同じくするグループと協力し、音楽の演奏や文化交流に取り組む必要がある。その取り組みを通じて得られる恩恵は、単なる音楽創りの喜びを超えたものであり、特に若いアマチュア音楽家にとっては、チームスピリット、仕事や技術に対する献身、一人ひとりの貢献が多くの人々に利益をもたらすということの理解、そして音楽を共有し、地域社会に奉仕することの価値を学ぶ貴重な機会となる。

これらの価値観は、日本アマチュアオーケストラ連盟（以下、JAO）および NPO 世界アマチュアオーケストラ連盟（以下、NPO-WFAO）と共有しているものであり、地域社会に根ざしたアマチュアオーケストラの育成と持続のための強力なアジアのモデルだと考えている。UP Arco が JAO および NPO-WFAO と初めて出会ったのは、2011 年に福岡で開催された第 1 回アジアオーケストラフェスティバルだった。私と当時 4 人の学生弦楽奏者にとって、非常に印象的で刺激的な体験であり、3つのオーケストラが奏でる大規模なアマチュアオーケストラのフェスティバルに参加したことは、大きな興奮と挑戦をもたらした。それは、他の演奏者と競い合うという意味ではなく、「各自が自分の能力を最大限に発揮し、美しい音楽作りを経験し貢献する」ということだった。その後、静岡でのフェスティバルや TOYOTA 青少年オーケストラキャンプ（以下、TYOC）を通じて、JAO および NPO-WFAO とのさらに実りある交流が続いた。今年で 40 周年を迎える TYOC に、コロナのロックダウン前から数シーズンにわたり UP Arco の学生メンバーが参加していることに幸運を感じている。

10 年以上にわたり、JAO や NPO-WFAO の音楽的協力や文化交流を通じて、両連盟が参加者や地域社会にどのような影響を与えてきたかを見てきた。両連盟が重視していたのは、コンサートの

運営のスムーズさや独立性ではなく、参加者が地域社会と深い絆を築き、そこに貢献することでコミュニティに良い影響を与えることであった。特に、都市部から離れた地域のオーケストラは、地域とのつながりを大切にし、優れたコミュニケーション力を発揮しながら、連盟のアウトリーチプログラムに積極的に取り組んでいることがわかった。これらのオーケストラは、個々の目標だけでなく、連盟の目標を達成するために地域と共に活動していたのだ。そのため、オーケストラの活動は、アマチュア音楽家と地域の人々が時間や労力を共有し、文化や芸術を共に育んでいくものとなり、日本のアマチュアオーケストラは定期的な演奏会やチャリティーコンサートを通じて、自分たちの音楽を地域の人々にとってより身近なものにしていったのだ。

日本人の考え方や存在を結びつける糸、それが強いコミュニティの意識だと私は信じている。日本は歴史の中で数々の社会的、政治的、経済的な試練を乗り越えてきたが、グループとして一つの目標を達成するという考え方が、日本人に変革のための共有文化を育んできたのだ。この精神こそが、日本のアマチュアやコミュニティオーケストラの生命を支えるものである。共に物事を成し遂げ、お互いの生活に影響を与え、変化をもたらすという理念が、コミュニティオーケストラでの演奏にも表れている。経済的に測定できるものではないが、地域社会とのつながりや共有資源の価値を大切にすることが、日本のアマチュア音楽家にとっての無形の財産そのものである。たとえば、マーラーやストラヴィンスキー、ショスタコーヴィチなどの難解な楽曲であっても、共同体の精神で取り組むことで、リハーサルや演奏はすべて価値あるものとなり、どのようなチームでも誇りに思う成果を得流することができるのだ。

JAO にとってオーケストラは単なる音楽づくりにとどまらず、アマチュア奏者が一体感を味わい、コミュニティの中で心、身体、魂を成長させる場である。個々のソリストとしてではなく、コミュニティ全体の一員として共に発展していくことに

大きな意味があり、このようにして JAO や NPO-WFAO は、日本だけでなく、世界中の国々や文化社会にも影響を与えてきたのだ。

フィリピンは私たちの弦楽オーケストラである UP Arco を通じて、友好的で励みとなる環境の中でオーケストラ音楽を学び、多くの知見を得ることができた。JAO フェスティバルや TYOC への参加により、音楽の訓練と技術を深め、音楽を通して人生における意味深い理解を育んできた。また、音楽活動だけでなく、市民ボランティアとしても（例えば、UP Arco のメンバーと共に台風ハイア

ンの被災者支援を行ったように）目的を見出すことが奨励された。こうした活動は、生活に困難を抱える人々に対して、コミュニティの絆や共有体験を豊かに感じさせる機会を提供している。また、音楽づくりは、特にフィリピン人が非常に音楽的で音楽を愛する民族であることを考えると、彼らを支える手段の一つとして私たちが見出した道である。このようにして、音楽という贈り物がフィリピンの国民にとって平等化の役割を果たしており、オーケストラのような音楽活動は一人や二人ではなく、多くの人々が参加できるため、共存や社会的責任、そして連帯感を育む場となっている。



写真 1-7. UP Arco のメンバー。2011 年福岡で開催された「第 1 回アジアアマチュアオーケストラフェスティバル」での写真



写真 1-8. 岐阜での「トヨタ青少年オーケストラキャンプ (TYOC)」に参加した UP Arco のメンバー (2018 年)

UP Arco は創立 25 周年を迎え、音楽がもたらすポジティブな影響を今後さらに広めていくことを目指している。私自身を含め、UP Arco の多くのメンバーが小さな子供の弦楽アンサンブルや弦楽オーケストラで訓練を受け、その後、通学した学校や大学のアマチュアオーケストラに参加してきた。この 25 周年を記念し、UP Arco の現役メンバーと TYOC や JAO フェスティバルの卒業生を含む一部の卒業生が集まり、大学内で小さな子供のオーケストラを立ち上げるようになった。アンサンブル音楽に興味関心を持ち、やがて音楽を共に奏でる喜びと規律に魅了されるであろう子供たちを対象にこの取り組みを始めたいと考えている。彼らが未来の社会のリーダーや変革者とな

ることを期待している。これは、日本が JAO や NPO-WFAO の長年にわたる献身的で情熱的な努力を通じて、数百のコミュニティでアマチュアオーケストラの活動を支えてきたのと同じ道を歩んでいくものである。JAO や NPO-WFAO が長年にわたり情熱を持って取り組んできた努力が日本にもたらした成果に倣い、私たちも同様の成功を目指している。

この場を借りて私の見識や学びを共有する機会に感謝したい。これからもアマチュアオーケストラの演奏活動がもたらす素晴らしさを共に広めていきたい。

## エドナ・マルシル「ミチ」マルティネス 教授

### Prof. EDNA MARCIL “Michi” MARTINEZ



エドナ・マルシル「ミチ」マルティネス教授は、フィリピン大学音楽学部を卒業後、ヴィオラの教員資格、音楽文学の学士号、および音楽学の修士号を取得し、フィリピン大学ディリマン校の三大学（美術学部、文学・芸術学部、社会科学学部）による博士課程プログラムにて、フィリピン研究（フィリピンの芸術と文化）で博士号を取得。フィリピン大学で初めてのヴィオラ卒業生としても知られている。フィリピン大学音楽学部の弦楽器と室内楽学科の元学科長を務めた。

幼少期に母親からピアノを学び、7歳でビセンテ・サレス教授とプリミティブ・マルセロ氏からヴァイオリンを師事。その後、ヴィオラに転向し、フィリピン大学音楽学部のセルソ・エストレヤ教授とリザル・レイエス教授から指導を受けた。

1998年、U.P. アルコ・フィリピン大学弦楽合奏団（当時はUP弦楽合奏団）を設立。創設以来、国内外でのコンサートや国際音楽祭やコンクールでフィリピンを代表し、弦楽オーケストラ部門での受賞に導いている。